

魯迅小説《孔乙己》を読む（2）

浙江省紹興に生まれた魯迅（1881 - 1936）は、自分のふるさとである紹興の町を舞台に、《阿Q正伝》や《故郷》をはじめ多くの小説を書きました。当時の紹興の様子が生きて描かれているこれらの小説は、魯迅が残した作品のなかでも特に評価の高いものです。ここでご紹介している短編小説《孔乙己》も、その代表作と言えるでしょう。

《孔乙己》は、魯鎮という町の立ち飲み居酒屋「咸亨酒店」に通ってくる孔乙己を、そこで働く小僧の目線から描いた作品です。孔乙己は、科挙の試験に落第し続け、すっかり落ちぶれてしまった読書人です。怠け者であるうえに酒好きで、貧しさのあまり小さな盗みを働くこともありました。しかし、それでもなお読書人としてふるまおうとする孔乙己を、咸亨酒店の主人や客たちはみな滑稽に思い、笑い者にしていました。しかたなく孔乙己は、咸亨酒店の大人たちを相手にすることをあきらめ、店で働く小僧（＝“我”）に話しかけようとします。今回は、そんな孔乙己と小僧とのやりとりを描いた場面を取り上げたいと思います。



〈豊子愷画〉

……有一回（孔乙己）对我说道，“你读过书吗？”我略略点一点头。他说，“读过书，……我便考你一考。茴香豆的茴字，怎样写的？”我想，讨饭一样的人，也配考我吗？便回过脸去，不再理会。孔乙己等了许久，很恳切的说道，“不能写罢？……我教给你，记着！这些字应该记着。将来做掌柜的时候，写帐要用。”我暗想我和掌柜的等级还很远呢，而且我们掌柜也从不将茴香豆上帐；又好笑，又不耐烦，懒懒的答他道，“谁要你教，不是草头底下一个来回的回字吗？”孔乙己显出极高兴的样子，将两个指头的长指甲敲着柜台，点头说，“对呀对呀！……回字有四样写法，你知道吗？”我愈不耐烦了，努着嘴走远。孔乙己刚用指甲蘸了酒，想在柜上写字，见我毫不热心，便又叹了一口气，显出极惋惜的样子。

〔注 釈〕

茴香豆：(名) ういきょうまめ 八角，ウイキョウ，桂皮を香料に用いて煮た空豆。

草头底下一个来回的回字：草かんむりの下に“来回”（行ったり来たりする）の“回”の字。このままでは意味が通りにくいので、〈訳文〉では「草かん

むりの下に一回二回の回」と意識した。

長指甲：長い爪。肉体労働をしないで済むことを誇示するため、読書人には、長衫（すそ長の上着）を着るほか、爪を長く伸ばす者がいた。孔乙己もそれに従っている。

回字有四样写法：回字には4通りの書き方がある。《魯迅全集》（人民文学出版社、2005年11月）には「回字には通常“回回回”という3通りの書き方しかない。4通り目は“圓”（《康熙字典・備考》に見える）と書くが、極めて少ない」と注釈がある。

〈訳 文〉

……ある時、孔乙己がわたしに話しかけてきた。「お前は字を習ったことがあるかね。」わたしは少しばかりうなずいた。孔乙己は言った。「そうか……それならひとつ試してやろう。茴香豆^{ういきしょうまめ}の字は、どう書くのかね。」わたしは、乞食同然の人間が自分を試すなんてと思い、そっぽを向いて相手にしようとしなかった。孔乙己は長いあいだ待ってから、親切な口調で言った。「わからないかな。……教えてやるから、覚えておきなさい。このような字は覚えておかなければいけない。いつか店の主人になったとき、帳簿をつけるのに必要だから。」わたしは心の中で考えた。店の主人になるなんて、自分とはあまりにかけ離れた話だ。それにここの主人だって、茴香豆だなんて帳簿につけたこともない。おかしいやら面倒くさいやらで、いやいや返事をして言った。「そんなの教えてもらわなくていいよ。草かんむりの下に、一回二回の回じゃないか。」孔乙己はひどくうれしそうにして、2本の指先の長い爪でコツコツとカウンターをたたきながら、うなずいて言った。「そうだ、そうだ……回字には4通りの書き方があるが、知っているかな。」わたしはいよいよ面倒くさくなり、口をとがらせて、そこから離れてしまった。孔乙己は爪を酒にひたし、カウンターの上に字を書こうとしていたが、わたしがちっとも関心を示さないのを見て、またひとつため息をつき、残念でならないという様子を見せた。

咸亨酒店の大人たちに笑者にされるだけではなく、店で働く小僧にまでうとまれてしまう孔乙己は、それでも酒を飲みたいがために店へ通い続けました。しかしやがて、そんな孔乙己が姿を見せなくなります。またもや盗みを働いたのが見つかり、足を折られるまで殴られたというのです。今回は、この作品のなかでももっとも印象の強い、孔乙己の最後の姿をご紹介します。